斎藤英喜「異端神道と日本ファシズム」に対するコメント

栗田英彦（佛教大学）

0. 自己紹介

・ 専門は近代日本宗教史、思想史、特に民間精神療法（霊術）・修養の歴史
・ 共編著『近現代日本の民間精神療法―不可視なエネルギーの諸相―』(国書刊行会、2019 年)『「日本心霊学会」研究―霊術団体から学術出版への道―』(人文書院、2022 年)、共著『コンスピリチュアリティ入門』(創元社、2023 年)

1．斎藤論文の要約

【概要】

・ 神社神道／教派神道／神道学とは異なる神道の近代＝「異端神道」の系譜を論じる。
・ 「異端神道」を民衆宗教やオカルティズムとして捉えるのではなく、「超国家主義（日本ファシズム)」と連動したものとして捉える。

「民衆宗教」という一面をもちつつ、体制内部にも食い込み、あるいは国家からの弾圧を受ける対象でもあるといった、複雑でパラドキシカルな存在であった。(201 頁)

【「異端神道」の具体例】

・ 出口王仁三郎（大本)、神道天行居（友清歓真)、矢野祐太郎（神政龍神会)、宮地厳夫（宮内省掌典／宮地神仙道）→星野輝興（宮内省掌典／自修鎮魂法／折口親友)、川面凡児（御稜威会）→今泉定助（神宮奉讃会会長／國學院創設／血盟団特別弁護人）

【「異端神道」と「体制」(宮内省・内務省）内知識人】

・ 星野輝興の日本精神顕修会（1932)：(白川資長、平田盛胤)、宮地直一（内務省神社局考証課)、吉田茂（内務官僚)、安岡正篤（国維会)・・・復古革新派の新官僚グループ
・ 川面凡児：平沼麒一郎（検事総長・国本社)、禊法が大政翼賛会で採用（1940）

【二つの超国家主義（ファシズム)】

・ 丸山の超国家主義概念（「体制」）　⇔　橋川文三の超国家主義概念（「革命」）
・ 内務省警保局秘密資料『ファシズムの理論』(1932 年）の「ファッショ」の定義：「資本主義祖経済組織の同様に際して出現した特異の運動形態」、「国家主義、反議会主義、反共産主義」という特色、指導原理は「日本主義」と「国家社会主義」の二系統。しかし、前者の「天皇中心主義」と後者の「天皇政治の徹底」は「それほど差異がない」(204 頁)。
・ 「革命」的超国家主義運動の担い手の「神道」思想 cf. 天野辰夫の「高天原国体論」

【「革命」的超国家主義と「異端神道」】

・ 「国家主義系団体員の経歴調査」『思想資料パンフレット特輯第二四号』(1941 年）
・ 千家尊建：出雲大社大阪分院長。関西圏の右翼活動家（渥美勝、田尻隼人、天野辰雄）との交友。千家尊建・大社教と出口王仁三郎の関係。
・ 鬼倉重次郎（足日公)：大隈重信暗殺未遂事件に連座した右翼活動家兼神道家。川面と

交友。筧克彦の影響。皇道斎修会（白川資長、平田盛胤）の設立、白川家（伯家神道）の「息吹永世の行法」を教習（≒星野輝興の日本精神顕修会）。一条実孝、井田磐楠、浜田三郎、頭山満、小笠原長生、筧克彦、鵜澤総明、山本英輔、荒木貞夫、水野錬太郎、平沼麒一郎らが顧問。

・ 個人修養、身体鍛錬が「政治性」を孕む。

【まとめ】

・ 丸山真男：「国体」の観念（天皇崇拝）と統治構造（天皇制）の二重性
・ 橋川文三：「現実の国家を超越した価値を追求」＝「異端神道」の「宗教性」→折口の「人類教」「普遍教」へ

2．コメント

【本論文の意義】

・ 神道研究において等閑視されていた越境的な水脈を掘り起こした点、そして（宗教史を超えて）丸山／橋川ら政治思想史の議論に接続して、神道思想と政治運動との関係を考察した点で、非常に画期的かつ刺激的な研究。斎藤論文および『神道の近代』の射程は、近代仏教史研究や近代エソテリシズム史研究、あるいは近代宗教史研究のみならず、政治思想史研究、制度史（神社や行政）やメディア史などとの越境によって、近代日本（思想）史を刷新していくプラットフォームを形成しうるのではないか。

【問いかけ――武田崇元氏の Twitter でのツイートを導きの糸として。】

『神道の近代アクチュアリティ問う』（勉声出版）恵投深謝。興味深い論考満載の一冊。山下久夫「近世の神話知と本田親徳」には本田をかく深く読み込む研究の出現に感無量。斎藤英喜「異端神道と日本ファシズム」は『平田篤胤、狂信から共振』所収の「神仙・調息・ファシズム」と同じ問題系の姉妹編。／斎藤英喜の問題系の焦点は宮内官僚星野輝興と「異端神道」との関係。浅学のわしは星野は宮地厳夫を師と仰ぎながら竟には造化三神を否定し国家神道イデを純化し昭 17 年の別天神論争を惹起せる「あっち側の人」イメージしかなかったが実はそれ以前は「こっち側」w だったことを明徴したのが一連の斎藤論文。／斎藤英喜氏には続いて星野輝興の「転向」に至る内的論理を闡明されたく期待したい。尚「異端神道」という括りには違和感あり王仁三郎、川面、友清、鬼倉、宮地までを射程におさめるには「対抗神道」という枠組で国家神道イデに対する各対抗性のベクトル及び深度を論じた方がわかりやすいと思うが如何。

＜論点①：星野の「転向」？＞

・ 東條内閣期、星野が天照大神を唯一最高神とする「星野神学」（cf. 星野輝興『国体の根基』1940 年、星野弘一『日本民族の哲学序説』1941 年）で統一しようとしたのは、葦津珍彦『国家神道とは何だったのか』で批判しているところ。それは葦津いわく「ゲルマン民族主義」に親近感を抱いて、「世界主義」ないし「四海同胞主義」を抑えて、「日本民族唯一主義」を採用しようとした軍部の目的と一致するものだった。このような星

野神学に至った星野は、日本精神顕修会（1932 年）から転向したのだろうか？星野の思想に連続性はなかったのだろうか。

・ また星野神学は、葦津のいう「在野神道」の「ミニコミ」を通じた批判――言論報国会幹部までも加わった[i]――に敗れ（1941 年の「別天神論争」）、東條内閣は一転して神道検閲方針を反転させて星野系著書を発禁、星野は宮内省掌職を辞任する（齊藤智朗「近代における造化三神論の展開」藤田大誠編『国家神道と国体論』2019 年）。武田氏は星野神学を「国家神道イデ」とするが、そもそも論争に敗れた星野神学は「国家神道イデオロギー」だったのだろうか。「国家神道」をいかに捉えるかは、戦後は喧々諤々の議論があるが、それはさておき、学者や知識人がどう言っても、神社の祭祀機能への限定と神社非宗教論が「国家神道」（行政的な神社の扱い）の核であったことは阪本是丸氏が指摘するところ。つまり政府による神道の思想的内実の規定がなく、神道人の「布教」が禁じられたためにこそ、知識人や民俗学者や神道学者がさまざまな「神道」論――「国体」論や「日本精神」論にも重なる――を展開できたのではないか。柳田国男から霊術団体（日本心霊学会）にまで及ぶ神社非宗教論批判とは、そのような“自由討究”的な神道論のなかから生まれ、みずからの神道論のヘゲモニーを名実ともに確立しようとするとき現れるものであり、それを実行に移すときに逆説的に神社非宗教論に伴う“自由討究”を否定して思想統制に至るものではないか（星野の非転向の可能性）。このように見た場合、真に「国家神道イデ」であるのは、葦津たち「在野神道」の非統制的神道論だったかもしれない。星野神学は神道思想の統制をしようとしたがゆえに、たとえ一時的に東條内閣に入れられたにせよ、ある意味で「異端」であり続けたとも言える。もう少し拡大して言えば、東條内閣の独裁性の脆弱さということでもあるが、ともあれ、非統制の統制とでもいうものを考察する必要があるのではないか。

・ 制度の問題に絡んで付言しておくと、宮内省、文部省、内務省、軍部、政党などなどの統治の要素は、実際には互いにヘゲモニー争いをする政治的アクターでもある。これについては、文部省の『国体の本義』成立過程において、内務省や在野知識人のヘゲモニーに対抗しようとする知識人としての文部官僚やその集団である文部省の戦略に関する、植村和秀の議論を参照（科研「昭和 10 年代文部省の機関哲学と國體明徴政策の相互制約関係についての研究」、植村和秀代表、科研番号 22K01347、2022～2024 年度）。

＜論点②：「異端神道」における異端／正統とは何か？＞

・ 論点①のように事態を把握したとき、「異端神道」と言ったときに、何をもって「異端」とするかが問われることになる。別天神論争の顛末が示すように、「正統／異端」の内実は、ヘゲモニー争いのダイナミズムのなかでコロコロ変わる。実践的な次元においても、後に教学錬成所（1943 年）で静坐座禅が行われたりするなど、教育行政の中枢にまで取り入れられることがある。本文中でも指摘のあるとおり、体制内部にも食い込みうるのであれば「正統／異端」という切り分けで良いだろうか。

・ 武田氏は「対抗神道」という表現を提案する。これは内容的なダイナミズムに開くものかもしれないが、しかし、結局、とりわけ戦中においては、政治的には皆誰かと戦って抵抗しているのであり、「対抗」もまた何に対抗しているかが問われ続ける。
・ 評者は、先週の近代仏教史研究会で、ニューエイジやオカルト研究で用いられる「(チャーチ)／セクト／カルト」の分類を前提とした「カルト的場」概念を検討した[ii]。ここでも、日本において「カルト的場」概念がそのままではうまく機能しないことを指摘した。だが、世界大戦の開いたグローバルな政治的・軍事的闘争の舞台は、一国内だけで「チャーチ／セクト／カルト(的場)」を論じることができないこと、すなわち「正統／異端」を考えることができないということでもある。
・ つまり、異端神道を、霊術・修養に通じるような心身一元論と政教一致への欲望を持つものと接続したものと見るならば、そこから逆に立ち現れて来る「正統」――神社非宗教論と絡む“自由討究”も含まれうる――を神道の枠を超えて考察できるのではないか。

＜論点③：超国家主義について＞

・ 一国ではなくグローバルで考える必要性は、超国家主義論にも当てはまると思われる。例えば、星野と対立的な神学を持つ、別天神を重視する今泉定助は、むしろ満州派のイデオロギーでもあった（昆野伸幸氏の教示による)。丸山的な超国家主義と橋川的な超国家主義は、対立するというより、ダイナミックに相互転換すると考えられるが、そうだとしても、いずれにせよ、その超国家性が何と対立しているかは、例え「人類」や「普遍」と言っても考えられる必要がある。
・ 私見では、丸山は制度と思想を切り分け、橋川は思想で制度を突破していくようなところがある。そう考えると、丸山の超国家主義は神社非宗教論的であり、橋川はやはり「異端神道」的である。このとき、戦後民主主義をどう考えるのか。象徴天皇制と（普遍的意義を持つとされる）平和憲法に規定されるそれを、超国家主義的にどう論じるかは、戦後の折口（あるいは三井甲之など）を考えるうえで重要だと思われる。

---

[i] このあたりは、拙稿「日本主義の主体性と抗争」石井公成・近藤俊太郎・名和達宣編『近代の仏教思想と日本主義』(法藏館、2018 年）のテーマとの絡みでも考えてみたい。
[ii] 栗田発表「カルト的場と総力戦――1930 年代の日本心霊学界・仏教・神道の交錯」第 31 回日本近代仏教史研究会研究大会、シンポジウム「近代仏教史とオカルト研究――吉永進一が残した課題の可能性」2023 年 5 月 27 日 於東北大学。